

特集

# 希望の

# フェスティバル

# PT

Vol.26

¥0

ほえん通信

こえとことばとこころで  
草の根マガジン

- 森田博一 都市計画コンサルタント
- 大谷煥 NPO法人DANCE BOX代表
- 雨森信 インディペンデントキュレーター
- 大隅要 まるごとコンサルタント
- 播磨靖夫 財団法人なんぼぼの家代表
- 上田假奈代 闘う詩人/詩業家
- マキクニヒコ ヘルパーアーティスト
- 石橋友美 紙芝居劇団「むすび」マネージャー
- アサダワタル 大和川レコード/薬港ARCディレクター

希望のフェスティバルゲート！

公益性・公共性について、考えたことがあるか。消費主体として生きるのか、創造的にグローバルに生きるのか、おもしろい、と思って踏みこんだら、いつのまにか社会に向き合っていた。社会という曖昧さではなく、社会のなかで生きている個別の問題を持った人たちに知り合い、一緒に考え込んだり行動するようになった。フェスティバルゲート周辺は昭和のような街で、平成の流れにはじきだされた人たちが、しろいモクレンの下をあてもなく歩いている。たまたずんでいる。大きな犬が寝ている。

猫が5匹道路を横切る。通天閣に入っていく旗を持ったバスガイドと長い列。車カッツに行列している横を吹き出しめがけて歩いている人もいる。段ボールを積んだリヤカーがゆっくりと歩いていく。雨の日はどこに行くのかしら。アートをやっている人ならば、ここ燃えるところよ。にやっと笑う。フェスティバルゲートにあるわたしの職場コロシアムでは片付けても片付けても起こる問題が山積みで毎日出勤しても片付かない。徹夜明けに通天閣横のラドン温泉に行く。ス

フェスティバルゲート豆知識

1903(明治36)年に開催された第五回内閣勸業博覧会の跡地に、1909年遊園地「ルナパーク」を中心とする娯楽施設群がつくられたが、通天閣とロープウェイのある画期的な遊園地もふるわず1923年に閉園。戦後は映画館の並ぶ興行街として活況を呈する。フェスティバルゲートは交通局の路面電車の車庫跡になり、1997年に土地信託事業によって建設された屋外型屋内型の遊具を併設し多ににぎわった。2002年から、大阪市によって空き店舗をアートNPOが活用する「新世界アーツパーク事業」がはじまり、質の高い文化芸術施策として注目された。同年に施設の借入総額は350億円になり、

パワフルでもいいけど、大衆演劇のポスターが貼ってある銭湯は、この街の日常歴史と湯船につかっている熱さがある。湯上がりで通天閣をくぐって仕事場に戻ると、フェスティバルゲートは売却されるかどうか、議論になっていた。

あり方が検討され、暫定公共利用を掲げたフェスティバルゲートのコンペは、行政としてやっとなりをあげたといえるだろう。この地域は産業の空洞化がもたらした都市型社会問題の集積地だ。新世界、西成、日本橋。必要なものは消費型の娯楽遊園地ではなく、官民協働による市民主体の社会問題解決型事業が集まるにぎやかな広場。NPOや社会企業家、地域の人々、専門家、研究者、企業、中高年の人も若い人も子どもの人も一緒に集まって、対話を重ね知恵をだしあい、汗をかくと共にこの街に活気を生み出していく。そして既存の建物を活用し再生するモデルとなって大阪の他の街へ、全国へ世界へ、この仕組みを伝播していく。創造都市・大阪の第一歩はフェスティバルゲートから。

04年に廃園となった。新たに実施したコンペによって運営することになったのはオリックスを主体とする企業連合体。乗り物をテーマとした複合商業ビルの改装プランに決定した。しかし、既存店舗の立退きの問題によって実施できず、同連合体は撤退。05年、大阪市による「あり方検討会議」によって検討され、05年末、フェスティバルゲート暫定公共利用コンペを行うことが発表された。06年3月に当法人が主体となり他のNPOと協力して、創造都市・大阪の第一歩となるコンペ案を提出。7月に結論がでる。

上田 假奈代(詩人・NPO法人えとことばとこころの部員代表)

1969年生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめ。01年「詩楽家宣言」のち、全国で活動をつづける。03年コロシアムを立ち上げ「表現と自立と仕事と社会」をテーマにホームレスや高齢者、ニート、教育、環境など社会的な問題にも取り組み、さまざまな分野横断の対話の仕方に興味を持つ。

最新情報(4月20日現在)

コンペ主催者より「第一次審査の結果通知につきましては、4月中旬を予定しておりましたが、6月上旬に延期させていただきます」との文書が届く。当初、7月中旬に公共利用案の(実施か否かも含め)決定がなされるはずだったが、先行きの見えない展開に。しかし、待ってはいられない。4月24日(火)20:00からremolにて、公開テーブル会議をスタートさせます。(プランが落ちるまで毎週同時刻開催)ぜひ、来てください!

生きるということは、ままならない。身すぎ世すぎのために、心ならずも面白くない職業生活に明け暮れなければならないことがある。グローバル化とやら、せいなのか、何をすることも複雑なルールや取り決めが個人がしばられることも増えてきた。そういうことの積み重ねで、人生のあらかたが埋められてしまう。だから人は自分自身をみつめ、自分を表現したくなる。

アートとは「表現を通じて自立的主体としての自分を確認する作業」と考える。だから「芸術というのは生きる術(すべ)」「生きている人はみんな表現している」(上田假奈代さん\*)ということが出来る。

「自立的主体としての表現活動」というアートの捉えかたは、堀田善衛氏によれば絵画ではゴヤ(1763年生まれ)に始まる。音楽ではたぶんベートーベン(1770年生まれ)あたりが始まる。

それまでは、つまり18世紀後半ごろまでは、画家とは、王族や貴族の肖像を描く人のことであつた。音楽家とは、王族や貴族に対して伴奏やBGMを提供する人のことであつた。閉ざされた一握りの同質集団に傳(か)しづいて、描かされ、演奏させられていた。

これに対し、ゴヤやベートーベンは作者としての立場で「表現」を始めた。このことによって、その作品は、特定の人物や集団に「納品」されるのではなく、不特定の人びとに対して問うものとなり、不特定の人びとに対して開かれたものとなった。ここに、アートと公共性が関係づけられる条件があらわれた。

ところで、あるサービスに公共性がある、ということはどういうことを指すのか。

第一には、不特定のだれもが等し並みにその利益を享受できるということ。国家レベルでは防衛や外交などがそれにあたる。コミュニティレベルなら、公園でおこなわれるイベントなどが該当するだろう。

第二には、社会に生きるすべての人びとが尊厳をもって自立的に生きるために支援することも、公共性があるものとして認めることができる。障がい者の社会参画を助けること、あるいは失業者の就労を支援することがこれにあたるだろう。

これらのサービスは、障がいをもつ人、職を失った人など、特定の人に提供されるものだから、「不特定の

だれもが等し並みにその利益を享受できる」という、第一にあげた公共性の定義には一見あてはまらない。だが、このサービスは障がいのある人や職を失った人——社会的に排除されがちな人びと——が第一の「不特定の人びと」——すでに社会の内部にいる人びと——と同列になるためのものであると考えることができる。つまり、第一の公共性を実現するための条件を整備することであるから、特定の人に対するサービスであっても、その公共性は認められる。「不特定の人びと」の集合とは「社会」にほかならず、障がい者や失業者がしっかりと社会の中で位置づけられるというソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)の公共的意義はここにある。

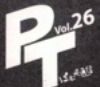
障がいのある人や職を失った人に対しては、これまでに行政による手がさしのべられてきた。ただ、その支援は、介護・介助サービスの提供、まちのバリアフリー化、就業情報の提供やマッチング、あるいは経済的補償など、「障がい」や「失業」などの現象に対して直接的に働きかけるサービスであった。

これらの支援が無益である、とはいわない。しかし、必要な支援はそれだけか。

障がいを持つことによるもどかしさ、職を得ることができないことによる自尊心の崩壊は、バリアフリー化や就業情報の紹介によって償われるものではない。これまでの行政による物理的・直接的な支援と並んで、精神的・内面的な支援が必要だ。その時、アートは、「表現を通じて自立的主体としての自分を確認する作業」として重要な役割を果たすだろう。

フェスティバルゲートの公共的意義を問う今回のコンペに対して、フェスグに入居するNPOたちが中心になってまとめた提案のテーマは「ソーシャル・インクルージョン」と「アート」である。ここに集う人びとが「生きる術」を得てエンパワメントし、つながり、フェスグの外にあふれ出て、まちがエンパワメントする。そんな「未来計画」を夢想する。

\*:2005年8月4日開催「新世界アーツパーク未来計画 第3回シンポジウム」における発言  
<http://www.log-osaka.jp/article/index.html?aid=238&p=1>



特集 希望のフェスティバルゲート



森田 博一(もりた ひろかず)

産業計画、文化振興ビジョンなどのプランづくりにたずさわってきた。なのに「計画」の意味に疑問を抱き、問い直してきたところが阪神・淡路大震災。以来、計画屋のかたわら、NPOの支援やコミュニティ・ビジネスのアドバイスにもいるとコミット。今回の原稿は「公共性」と「計画」の2つのテーマでの執筆を構想していたが、計画性のない文章展開のために「計画」のほうはあえなくサドン・デス。阿倍野区生まれ、豊中育ち、神戸住まい。



私たちDANCE BOXが、フェスティバルゲートに拠点を移したのは、2002年。私は大阪生まれの、大阪育ちであるが、フェスティバルゲートのある新世界に来たことは数回しかなかった。高校生の頃、当時、天王寺の公園内にあった野外音楽堂で芝居を観た帰りに、新世界に寄ったことがある。大阪万博景気でたくさんの労働者が全国から集まってきて、新世界も活気に溢れていた。そんな大人たちの間を駆け抜けて子どもが遊んでいる。

「にいちゃん、今何時？」

「〇×時や」

「おおきに。なんやけっこう、ええ時計してるやん。ほな、さいなら！」

まさに、じゃりんこチエのようなたくましい子どもに感心したことを覚えている。現在の新世界は、そんな子どもを見ることはなくなったが、大衆芸芸場やスマートボール場、囲碁センター等に昭和の香りを感ずることができる街である。

私たちの活動は主としてコンテンポラリーダンスの創造環境をつくることにあるが、同時に自らの劇場をもつことで、地域に対してどのようなことができるのか、という課題が出てきた。まず、私たちの劇場がこの地域にあるということ、その劇場のなかで公演されているコンテンポラリーダンスのことを知ってほしいと思った。そこで企画したのが「コンテンポラリーダンスin新世界」である。これは、街中でダンスを踊る現場をつくるとともに、ツアー客には新世界の街の魅力を発見してもらうという企画である。毎年続けることで、少しずつ、地域の人に私たちの活動について知ってもらえるようになってきたと思うし、他地域の人が新世界の街をおもしろいと思うような変化も起きてきたと思う。その他にも、オランダのアーティストが地域の高齢者と共同して作品制作をした

り、小学校でワークショップを行ったり、老人憩いの家で出前ダンスをしたり、或いは日本橋のパレードに参加することで、私たちにとってこの街がかけがえのない場所になってきたのである。昨年8月に新世界アーツパーク事業を担う4つのアートNPOが共同して開催した「ビッグ盆！」は、42年ぶりに地域の盆踊りを復活させたり、小学生と新しい盆踊りの創作をしたり、アートを通じた地域との協働が成功した事例となった。

そんななか、新世界アーツパーク事業が今年7月をもって打ち切られることになり、暫定公共利用のコンペが行われることになったのである。商業施設としてはすでに失敗しているわけで、今回のコンペの大きな焦点は「公共性」をどうとらえるのか、ということにあると思う。従来の公共性は近代産業がもたらした大量生産、大量消費に裏付けられた「量」の基準によって計られてきたが、その結果、皮肉なことに大きな格差社会をつくってきてしまった。そのことが家庭や教育現場から一般社会に至るまで、様々な問題を引き起こしている。

今、社会的弱者の視点から社会を見直すことが必要とされている。今回の提案でソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)とアートという概念を二本柱としたのもそのような理由からである。多種多様な人が相互の価値観を認めながらコミュニケーションをとり、共存共生できる社会の実現。それが、創造都市の実現にとっても必要不可欠なものとする。フェスティバルゲートの再生は、すなわち大阪という都市の再生につながると思うことは、決して大袈裟なことではない。今回のコンペは、現代建築遺産といわれるフェスティバルゲートが、近未来に向けた実験的なワンダーランドに変身する絶好のチャンスと考えている。

大谷 煥 (おおたに いく)

大阪生まれ。1991年から2001年までTORII HALLプロデューサー。1996年、「DANCE BOX」を立ち上げ、ジャンルを超えたコンテンポラリーダンスの公演・WSを年間約30本企画制作する。2002年DANCE BOXをNPO法人化。大阪・新世界フェスティバルゲート内に「Art Theater dB」を開設し、アーティストの育成と地域社会とアートの新しい環境づくりに力を注ぐ。近畿大学国際人文科学研究科講師。神戸大学国際文化学科非常勤講師。関西経済社会研究所文化アドバイザー。



いつからか日常から切り離された芸術を再び社会の中に取り戻すこと。2003年より新世界を拠点に展開してきたアートプロジェクト(Breaker Project, art school, art in the city)は、その実践である。既存の美術空間、システムでは飽き足らず、独自の表現方法を開拓し活動する美術家たちと、まちや人と関わりながら創造の現場をまちの中に創出するプロジェクトである。

新世界は、2002年からスタートしたNPO法人remoがスペースをかまえるフェスティバルゲートが位置するところ。たまたまここに拠点をかまえることになった私たちは特にこのまちと縁があったわけではない。

この新世界との最初の出会いは、伊達伸明による「ウクレレと歌留多で語る新世界」。取り壊される建物の一部からウクレレを制作し、在りし日の家の記憶を保存するという活動を行う伊達は、新世界の現存する建物、おもに店舗を中心に60軒の各々歴史や思い出を聞き取るフィールドワークを実施。もちろん営業中の店舗の一部を切り出すわけにはいかないので取材先の建物を「もしウクレレを作るとしたら」ということで写真で撮影。その写真とインタビューから「新世界ウクレレ歌留多」が完成した。

その他、通天閣下や新世界、西成の各所で開催した移動式カフェ「野点」(きむらとしろうじんじん)。子どもがお金を使わずに遊び、学び、創造する場としての「かえっこ」(恵美小学校、敷津小学校)や子どものためのパブリックスペース「マイグレルミシアター」(藤浩志)の開催。

古くなったものや空間に色を塗ることで再生させるという活動を展開するフランク・ブラジガンドは、大阪に残る最後の路面電車、阪堺電車の車両と恵美須町駅、また日東小学校や愛染公園(日本橋)の遊具をペイントするプロジェクト「Urban Concern - Osaka」を子どもや一般の参加者と共に行った。

また、昨年行った「新世界・映像日記」では、地元住民12名が自らかメラを持ち、自分たちのまちを撮影。映像で切り取ることで、まちに潜在する魅力や歴史を再発見し、テレビなどのマスコミでは取り上げら

れることのない新世界の風景をインターネットで発信している。コミュニティ・メディアづくりに向けた第一歩である。子どもの頃の遊び場だった美術館周辺、路地、普段の仕事場(お店の中)からの風景、通天閣50周年記念の点灯式など、実に様々な視点で撮られた多様な新世界が150点ほど集まっている。

(http://breakerproject.net/eizonikki/)

このように、アートを媒介にまちに出会い、コミュニケーションが生まれ、お互いに刺激され相互に作用することで、また新たな活動が始まる。少しずつではあるが、まちにアートが根付き始めたのだ。これは、私たちの活動のベースが新世界のフェスティバルゲートにあるからこそ出来たことであり、4年間の活動の成果でもあると言えるだろう。しかし、私たちはまちづくりの専門家ではないし、アートはまちづくりのために存在するわけではないということも言っておきたい。このような活動ですぐにまちが活性化するほど、アートは便利な代物でもない。新世界、日本橋、西成とそれぞれが問題を抱えるディーブ・サウス・オオサカ・エリアが、今後活気ある魅力的なまちへと変わってゆけるかどうかは、住んでいる人自身がまちの未来像をイメージし、それに向かって活動を生み出してゆけるかどうかにかかっている。その時に、アートに潜む創造力、新たな視点や価値観は重要な要素となる。言ってしまうとアートの役割なんてそれだけのことなのだけれど…しかし、まち、そしてさらには社会の大小様々な問題をクリエイティブに解決する「第三の方法」を開発するためには、もしくはがんじがらめで身動きの取れない状態を突き抜けるだけエネルギーを生み出すためには、やはり創造力は欠かせないのだ。また、その創造力が花開くためには、長期的な展望が必要であろう。「創造都市一日にして成らず」である。まずは、既に存在する活動を継続すること、そしてさらなるダイナミズムを生み出す魅力ある場として、新たなフェスティバルゲート「アート&ソーシャルインクルージョン 創造的公益事業モデル創出事業」を実現することを切望する。

雨森 信 (あめのもり のぶ)

2002年、NPO法人記録と表現とメディアのための組織[remo]を立ち上げ、上映会や展覧会などを企画。また大阪市の文化事業として「Breaker Project (2003-2004)」や子どもを対象にしたアニメーションワークショップ「art school」(2005)、「art in the city」(2006)プロデュース。様々なプロジェクトの実践を通して、芸術と社会をつなぎ、まちの中に創造活動の場を開拓。



『野点』  
きむらとしろうじんじん, 2004



Urban Concern - Osaka,  
阪堺電車363号/  
Franck Bragigand, 2004

●はじめに  
NPO法人こえとことばとこころの部屋が事業主体である「フェスティバルゲート公共利用提案案競技」会議に参加させていただいた。「ソーシャルインクルージョン」という興味深いテーマと、関わる面白い人たちに吸い込まれたのが本音のところである。私はこれまでフェスティバルゲートに遊びに来るどころか、通り過ぎたこともない人間である。だからこそ、客観的な立場として、少しばかり「希望のフェスティバルゲート」について書きたいと思う。

●本提案について  
今回の提案事業名は「アート&ソーシャル・インクルージョン創造的公益事業モデル創出事業」とある。私の解釈では、「個人・企業問わず、さまざまな利害関係者が、さまざまな社会的課題を解決するプロジェクトを作り上げていくもの」と考えている。全体のスキームとしては非常に素晴らしいものであり、「かゆいところに手が届く」、「待ってました!」という拠点の誕生である…といたいところであるが…ゆえに困難さにつきまとう。上記であえて「さまざまな」という言葉を連ねたが、これがやっかいなのである。マーケティング的視点からいえば、STP(セグメント、ターゲット、ポジショニング)が明確ではないのである。的を絞ったほうが案である。当然のことながら、本提案も、実際に稼働するならば、脂肪がそぎ落とされ(骨抜きではなく)、優先順位を決めて事業が遂行されていくのであろう。ただ、その「こった煮」感に魅力があり、希望があるのだと、勝手に思い込んでしまったのは私だけだろうか。

●これはもう「街づくり」ではない  
街づくりという枠を超えたものが、この提案書には存在する。周辺地域との連携は欠かすことができないが、その枠を超えた提案が、ここにはある。それは当然のことである。街はコミュニケーションの発火

装置である。地域へのベクトルとともに、地域外へのベクトルも向けなければならない。また「input/output」だけでなく、インタラクティブ性(双方向)も必要である。本提案の実現は、この地域に新たな装置が産まれることを意味している。

●「産みの苦しみ」はつきものなのだ  
とはいいつつ、希望には「産みの苦しみ」がつきものである。この提案事業を実施するための課題は山積みである。客観的にとらえれば、大きく区分し①運営体制の整備、②収益の安定化、③プロジェクトの持続的創出化の3点が挙げられる。

①運営体制の整備  
上記に述べたように、本提案事業はさまざまな利害関係者がさまざまなプロジェクトを創出することを目的としている。それを統括する人材は果たしているのであろうか。学識経験者、専門家が必要なのであろうか。本当に必要な人材は「ゼネラリストのスペシャリスト」というコーディネータである。

②収益の安定化  
本提案の事業主体は、当然のことながら行政機関ではない。潤沢な資金があるわけでもなく、運営資金は、自分たちの手で稼がなければならない。ディベロッパー収入(テナント賃料など)のみに依存するのではなく、多面的に収益構造の安定化を図る必要がある。

③プロジェクトの持続的創出化  
どのような仕事もそうであるが、長く続けることは難しい。補助金や助成金を活用しながらプロジェクトを推進していくことになるが、自主財源によるプロジェクトを創出し、たとえ公益性のあるビジネスモデルを構築することが必要である。どこかで聞いたことがあるような文句ではあるが、この当たり前を当たり前にすることが、希望へと導く処方箋だと考えている。

大隅 要  
1976年生。関西学院大学商学部卒業。支援機関に勤務後、独立。街づくり支援、商品開発といったクライアントワークとともに「政策から製作、医療から衣料」までをコンセプトにさまざまなプロジェクトを展開。といいつつ家業である薬局の経営にも従事し、地域医療を模索する。関西学院大学大学院総合政策研究科前期博士課程修了(総合政策修士)。



日本でいち早く「ソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)」という概念を提唱されたのが播磨靖夫さん。たんぼほの家では30数年前から、障がいをもつ人たちのアートを媒介にして、地域や海外、大学など、異なる分野の方を包摂しながら活動されています。

●上田(以下ウ)：おかげさまで社会的包摂の重要性を考え書類が提出できました。

●播磨：これまで消費の場であった都市のあり方が問われているね。フェスティバルゲートは都市の負の遺産。まさに象徴だと思う。本来、都市の感性というのは、そこに暮らす人、働く人、学ぶ人たちの一人ひとりの歴史や生活史に光をあてられるものなのに、時代としては逆行してるんです。どんどん排除しているのが現状です。一人ひとりの個性、文化、役割、そして物語が豊かに紡ぎだされてこそ、都市の魅力になるのね。でも、そこでこれまでの都市の感性に異議申し立てをして、オルタナティブをつくりだそう、働く場、遊ぶ場、学ぶ場をつくらうと声をあげていくことが大事なんですよね。

●ウ：フェスティバルゲートのコンペ書類を作りながら、市民意識が高まりました。これまで、ぼーとしていたなと反省も。いい機会をいただいたと思っています。

●播磨：何事も変化は、危険でもあるけど、チャンスになるんだよね。変化をどう読み解くのか、どう向き合っていくのか。僕もね、奈良にたんぼほの家をつくってきたのは、時代の変化の先を読みながら誰もやらなかったことをやろうと考えたから。お金があれば誰だつてできるものには興味がない。ないない尽くしだから、生まれてくるものがある。その際に、地道なこと、コツコツも大事だけどね、石橋を叩きすぎて壊してしまてはいけない。目標に向かって戦略的にアプローチしないとね。まず実現可能なプランを2つか3つたてる。小実験をやって手応えがあれば勇気をもって行動する。その時注意しないといけないのは、夢を追いかけるだけではなく、それが社会的に意義があるのか、時代の先取りか分析をして、ちゃんと優先順位を決めること。そして粘り強くまわりを説得していく。

●ウ：切迫すると、戦略と冷静な視点はつつい失いがちです。

●播磨：たんぼほの家のスタッフにいつも言ってるのはね「ニーズにこたえるのは誰にでもできる。ニーズの先取りをしる。気にいられるものだけではなく、

気にかかるもの!」何かやりたいことがあって、続けていければいい出会いがある。幸運というのは偶然ではなく、必然が要る。

●ウ：フェスティバルゲートにとって幸運とは人が運んでくるものだと思います。たくさんの方が来てくれば再生すると思うんです。

●播磨：あのビルには「参加型」が必要だと思うよ。でも、ただ人が集まればいいというものではないですよ。美の女神は細部に宿る。せっかくアートNPOがやってるのだから、美学をつらぬかないとね。本当におもしろいことっていうのは毒のもり方なんです。毒の量を時代や社会にあわせて加減してこそおもしろい。

●ウ：7月までのフェスティバルゲートに具体的なアイデアはありますか?

●播磨：映像を使ったらいいんじゃないかな。個人が所有している古い映像や大阪を売り出す映像、子どもたちや地域の人巻き込んで、いろんな映像のフェスティバルをしてみたら。インクルーシブのテーマが入っていればいいね。

●ウ：いろんな可能性が眠っています。7月のコンペの結果までの短い期間ですが、がんばります。

●播磨：限られた時間のなかで集中することは大切です。書類の言葉はまだ少し硬かたね。行政語、企業語、市民語、NPOはこの3つの言語を使いこなせるようにならないとね。それに、コピーも作らないと。マイストーリーではなく、あなたとわたしのアワーストーリーを紡ぐ場になり、それが都市の創造性と重なるように。そのイメージを伝えるコピーが必要。

●ウ：はい、考えます。

●播磨：20世紀は物質の時代と言われていてね、効率化と市場原理がつながりを分断してきた。21世紀は非物質の時代と言われている。分断されて孤立化し活力を失ってきたものを、再びつなぎなおすことが大事。その役割を果たすのは文化芸術なんです。都市再生にクリエイティブな発想が必要なのはそのため。人の夢のなかに自分の夢を発見していくことほど楽しいものはない。媒介者となって、異なったものから学び、異なったものを持ち込み、異なったものを結合していく。異なったものの距離が離れていければいい。それはクリエイティブな試みなんですよ。

●ウ：創造都市・大阪として、わたしたちの物語がきらりと光る場にしていきたいです。今日はありがとうございました。

播磨靖夫(はりまやすお)

財団法人たんぼほの理事長/社会福祉法人たぼうしの会理事長/エイブル・アート・ジャパン常務理事/特定非営利活動法人日本NPOセンター代表理事。新聞記者を経てフリーのジャーナリストとなり、市民運動として障害のある人たちの生きる場「たんぼほの家」づくりを展開する。

またアートと社会の新しい関係をつくるエイブル・アート・ムーブメント(可能性の芸術運動)の発起人やボランティア活動など民間非営利セクターの形成を通した新しい市民社会づくりを試みている。編著書に「知恵社会のネットワーク」(柏書房)、「生命の樹のある家」(たんぼほの家)ほか。

# ざわめきフェスティバルゲート

上田假奈代

名前のSが剥げる、シャッターの閉まる、巨大な曲線が空をゆがめて、バスが通過する

新今宮の交差点で  
新世界のつぼら屋の前で  
見上げたフェスティバルゲートは  
いつも平成の片隅でおおきな体を  
持てあましていた

一昨年、遊園地が閉鎖されるその前日  
まだ少女の横顔をのこしたアミューズメント従業員が  
遊具の座席を雑巾がけしているのを4Fの廊下からみた  
西成に真つ赤な陽が沈む

「けったいな建物やな」  
「そもそも何でこんなもんつくったん」  
「海底に沈んだ都市やって」  
「ほんまに沈んだんやな」  
「この建物立派よ、現在じゃもう作られへんよ」  
「遺物？」  
「遺産。活用できたらね」

たくさんお金をつかって  
たくさんモノをつくり  
たくさん売って  
たくさん買って

飽きて要らなくなったら  
ちよっと汚れたら  
ちよっと具合が悪くなったら

すぐに捨てる

捨てたものがどこに行くのか  
この国では考えない(ことになっている)

仕事を失い  
責任を失い  
関わりを失い  
どこに行くのか

フェスティバルゲートは  
投げかけられたひとつの問い  
市民は誰か  
どこにいるのか

大阪の歴史は直線ではない  
何本もの川が交わり流れ  
海にそそぎこんできたように  
橋を渡って  
行き交ういろんな顔をした人々が  
大阪をつくってきた  
米会所も  
焼け野原の復興も  
中小企業もお商売も土木も  
働く人々がまちをつくってきた

つくってきたものと失ったもの  
変化しつづけることが重要で  
いまを生きる人が問われている  
フェスティバルゲートは無言で夕陽をあびている  
大阪に夕陽が照り返す  
歴史をひきうけ未来のざわめく創造の先に

## 特集 希望のフェスティバルゲート



■ マキクニヒコ

1969年兵庫県播磨赤穂生まれ。小学校非常勤講師→ロックバンドのベーシスト→児童劇団プロデューサーなどを経て現在は障害者のヘルパー。ヘルパー仲間との浜村不純氏と音楽ユニット「コマイナーズ」を組んでゆるく音楽活動中。伝説のスーパーグループ「ほろぎぼしプラザーズ」をcocoroomと共同でプロデュース。この春から私立高校の非常勤講師と阿倍野ヒューマンドキュメンタリー映画祭の事務局も引き受けてしまった。頼まれると断れない性格。

あれは2003年の5月くらいだったかな。上田假奈代さんがフェスゲの一角に拠点を持って活動することになったらしいよ、という噂を耳にした僕は早速どんなところか覗きに行ったことがある。初めて入ったcocoroomは床のところどころにブルーシートが敷かれていて、手作りの内装作業がまだまだ当分続きそうな様子だった。それでも假奈代さんは突然訪問した僕のために手を止めてお茶を淹れてくれた。「ねえマキさん、ここで何か企画やってくれへん?」「うん、ええよ。で、どんなことをしたらええんかな?」「それがね、わからへんのよ…」半開きの出入り口から強い西日が差し込み、フェスゲ館内に強引に流れる空々しい童謡が思考を分断させる。環状線の走る音をいくつか数えながら、この場の行く末をイメージできないまま僕は帰ったのだった。あれから4年。



■ 石橋友美

奈良県在住。05年よりNPO法人こえとことばとこころの部屋からマネージャーとして紙芝居劇むすび(http://musubiproj.exblog.jp/)に派遣される。日々のマネージャー業務とメンバーのサポートを担当。00年にオーストラリアでバーマカルチャー(持続可能な暮らしの体系的デザイン)を学び、自然を根拠に据えた視点から高齢者のもつ味わいや魅力を探る。そのかわら、日本舞踊千原流・千原彩風として活動を開始したところである。

わたしにとって、フェスティバルゲートは、今マネージャーをさせていただいている紙芝居劇むすびへの窓口だった。コクルームがあったからだ。むすびのおじさんたちとフェスティバルゲートに絵の具や画用紙を買いに来て、ついでにコクルームに寄ってお茶を飲んだり、公演をさせてもらったり、目と鼻の先の西成から、ちょっとご近所にお出かけという感じで、わたしはここをむすびの第2のふるさとみたいだと思っている。フェスティバルゲートがなくなるかもしれない、と聞いて、抜け殻になった店舗の暗闇から「もったいない」という恨めしい悲鳴が聞こえてきそうだった。この奇抜な建物は、ここで行われるべき奇抜な発想を待っている。浪速区と西成区がぶつ

フェスゲがある場所は社会と向き合わざるをえない聖地だった。それぞれの領域でアート活動を展開するために移ってきたはずの人たちがこぞって社会的な問題に身を投げ、アートの切り口でもって問題を切り開くようになっていった。その動きの先頭に立っていたのがcocoroomだ。おそらくcocoroomが目標を立てて計画通りに、なんてことを一番やっていなかったからこそこうなったのだと思う(失礼!)。行き着く先が見えてなくても、次々と降りかかる問題はその都度走りながら考えてきた。そういう態度は無責任なのではなくて、社会に対して向き合う覚悟があるからこそできる態度なのだ僕は思う。計画だけは立派で、その通りに進めていくことには心血を注ぐけどあとは思考停止という無責任な態度の会社の人間によって生まれた、前代未聞の大失敗フェスティバルゲート。もうこれは無かったことにしてしまいたいと思っている大阪市は、ここを公共利用するなら立派な計画を出せと言う。そして、言われたとおり立派な計画をフェスゲチームは提出した。でも、狛犬のようにそばで見ていた僕の本音は、計画に縛られず今までどおり走りながら考えて進めるのがいいと思う。前代未聞の失敗の中に芽生えた前代未聞の起死回生の種。フェスティバルゲートがまるで花畑ようになっていくイメージを僕は持っている。

かる、この密度の濃い空間には 個人的にも好きな大阪プロレスもあるし、この街が好き!というニオイがぶんぶんしているのに。フェスティバルゲートに行くと、流れ着いた旅人風のひとが、ひとり空を見上げている場面に出会う。このような人たちがホッと息を吐けるような場所、むすびのおじさんたちのような隠居組がお出かけてきて、若者とことばが交わせる場所があれば、お互いにいい刺激にもなると思う。ようするに、お金が根拠にならなくても豊かに過ごせる非営利な空間も街にはないといけないと思うのだ。街はどこも経済で目まぐるしく移ろっている。そしてそれに疲れた人が、立ち止まることもできずにはじき出されていく。その人たちが、リフレッシュできて、人と出会って、ビジネスや市民活動を思いついたり、また元気に出かけて行くようなロータリーの場所が必要だと思う。ちなみに、むすびのおじさんに希望を聞いてみると、住民票発行とか住民サービスの窓口があったらなあ、と言っていた。人がのんびりと集まるような場所があれば、もちろんな紙芝居劇も披露できるだろう。フェスティバルゲートの行く末を語り合うこと=理想の街づくりを語りあうきっかけになっていることに気づく。もっとじっくりそのプロセスを楽しむ余裕があればいいのですが…。

アサダワタル(大和川レコード/築港ARCディレクター):

日常と表現のハザマをみつけない。弾き語りを中心に打楽器演奏からビデオパフォーマンス、アートスペース運営からネットラジオまで!何でもやります。みつかるまで。  
http://www.geocities.jp/endeavor0203/ http://www.webarc.jp/

コクルームの活動に関わって早3年半経過。なんだかんだとやってきた活動は、いつしか「アートスペースの運営」という枠を大きく超えて、「アートによる社会変革」という一大プロジェクトとなっていた。近年のコクルームの活動の総括として行われたプロジェクトを挙げるのであれば「ことばち ~ことばをともだち」と「就労支援力フェBANDコクルーム」だろう。その中でもとりわけこの現在進行形のコクルームプロジェクトをひとつのロジックとしてカタチにした機会が「アートの領域・アートの価値」というシンポジウムだったように思う。

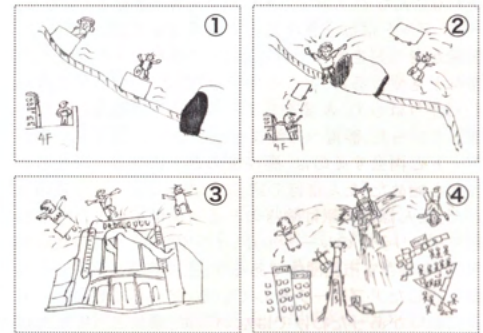
「アートが社会参加としての活動であるとするとき、当事者のもつ問題意識がアートに関与するきっかけとなる。当事者の数だけ、さまざまなアートのカタチがあり、アートの領域はそれだけ広がる。」(上記シンポジウムチラシより)

フェスティバルゲートで約4年半活動してきたコクルームも含めたアートNPO群は、この期間、まさに自身が、アートを社会化せんとする「問題意識をもった当事者」であった。僕ら、アートを実践する現場側は「当事者のもつ問題意識がアートに関与するきっかけとなる」その「当事者」がもつ「問題意識」がイコール「アートを如何に社会化するか」(もっと生々しい現場の問題でいえば「どうすればアートに関わって生活を営めるのか」)であるという入れ子構造が成り立っているように思え、僕ら自身がアートで「りっ」する(自立/自律)ために、またその解決手段にアートを、社会と繋がるためのいくつもの試行錯誤を繰り返し、プロジェクトをアーカイブしてきたように思える。僕ら「当事者」は、「当事者」であるがゆえに、自分たちのことで手一杯だった部分もあることは否めず、「アートの領域・アートの価値」の企画趣旨のようなことを客観的に、確固たるロジックを持って、社会に生きる様々な価値観を持つ人々(数の話で言うと、このロジックを伝えている僕らサイドの方が、大半の人たちに「ふーん、こんな価値観の人たちも稀におるんやなあ」と思われているのが実情だ)に伝えてゆけているかという、まだまだ反省するべきところも少々ある。しかし最近、少しずつではあるがアートの現場側「当事者」が「当事者同士の問題間」を超えて、ひとつの「吹っ切れ」を起こし、今までコクルームが行ってきたような「アートによる社会変革」を明確に事業として視覚化する動きがおきている。それが今回のフェスティバルゲートの再利用案だ。「吹っ切れ」とは、「アートが関わる領域の広がり」から「アートそのものの領域の広がり」への移行である。

この移行は、もはや「アート」というタームが、コクルーム的な社会事業を的確に表してくれる最優先のタームではなくてゆくことも同時に意味している。そのことは「良い」とか「悪い」とか、「やっぱりアートでない!」とかを議論するような類の問題ではなく(個人的な話でいうと僕はアートのためのアートも同時に好むし、必要だと思っている)、事実、今フェスティバルゲートで行う(かもしれない)プロジェクトの方向性を考慮し、より充実した実現を目指す上では、そこには「アート」だけではない新たなタームと再ロジック化が必要になってくると思う。コクルームが今後、「当事者間」を一層超えた社会変革を行っていくことに期待し、アートというタームに縛られないカタチで、でも同時に結果として「アートそのものの領域」を広げることに成功することを心から望んでいます。

大和川レコードの描き採取られた日常

画：アサダワタル  
お題：希望のフェスティバルゲート(未来に飛び立つ)



どんなに真面目な話をして、ひとたび絵を描けばこんなにひょうきんなあさださんは本当に信頼できるアーティストなのです。



## 科学とボクと、時々、アート



高橋 隼 (たかはし じゅん)

1979年生まれ。高校生のときに、友人に半ばむりやり連れて行かれ、「たんぼの家」でのボランティアを始める。大学では地球科学を専攻し、卒業研究では「京都が一番暑いのはどこか？」をテーマに(硬く言えばヒートアイランド現象)、市内を自転車で走り回る。卒業後、たんぼの家プロジェクトスタッフとして活動し、「エイブル・アート近畿 ひと・アート・まち」などに関わる。2007年4月から、宇宙生物との出会いを求めて(硬く言えばアストロ・バイオロジー)、神戸大学大学院に進学。

『科学とアート』——この言葉を食べ犬通信の表紙に見たときは、「ついに来た!」という喜びと「なぜcocoroomが?」という疑問が入り混じった感情に、とても

胸躍ったことを覚えている。それほど僕自身が関心をもっていたテーマでもあったのだ。その後、さっそくcocoroomの科学とアート・ウォーミングアップ企画の大阪市立科学館ツアーに参加し、事務局の飯島さんと出会う。「とにかく何かいっしょにやってみよう」ということになり、一度話し合いを持ち、いまこの原稿を書いている。僕にとってはうれしい限りだ。なぜなら、数年来気になっていたこのテーマを共有できる人と知り合い、何かしらのカタチにするために動き出すことができるのだから。

なぜ僕がこれほどまでに『科学とアート』に惹かれるのか。まず経緯を追って記させていただきたい。科学への関心のはじまりは、幼稚園か小学1・2年のときだ。当時、「種類もの」が好きで、ロッテの板状チューインガム、ウルトラマン、パンジーの花などを「全種類」集めては喜んでいた。その一環で、「天気」のことが気になりだした。「お天気全種類」と称して、晴れ・曇り・雨・雪・あられ・ひょう・霧・オーロラなどを一枚の絵に描いて遊んでいた。天気の図鑑も買ってもらい、飽きることなく眺めていた。その後、父がよく借りてくる科学雑誌「ニュートン」に熱中したり、高学年になると、宇宙論や素粒子論についての教養書を読んだりしていた。興味の内容は「宇宙」や「地球」だった。そんなこんなで、大学では地球科学を専攻することになる。一方、アートははっきり言って疎遠だった。幼いころは、お絵かきも好きだったが、小学校に入り図工の授業などを受けると、どうも自分は「うまい」ほうではないとわかりはじめ、表現することへの苦手意識ばかりが強まっていた。観賞への興味もわかなかった。そんな僕がアートと再会するのは、高校生のときにひょんなきっかけから始めた「たんぼの家」でのボランティア活動のなかだ。たんぼの家は障害のある人をはじめとした社会的マイノリティのソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)をめざす市民団体であるが、主に芸術文化や表現活動を通じたアプローチをしている。アートにも福祉にも特に興味があったわけではないのに、僕にとってたんぼの家は魅力的で、どっぷりはまっていた。大学生になると、障害のある人の作品の展覧会などのアートイベントでボランティアコーディネートをする機会もたびたび経験した。そんななかで出会う、障害のある人の作品や集

まってくるアーティストや美大・芸大生は、とても新鮮で刺激的だった。そのうち、たんぼの家のイベントに限らず、たまに美術館やギャラリーに行くようになった。今でも、表現することへの劣等意識は払拭されていないが、時折アートに触れたいくなる「のどの渇き」に似た感覚は、確かに自分のものとしてあるのだ。

このように僕のなかには、科学とアートの関心が共存しているのだが、どうもふたつのおさまりが悪い。例えば、僕自身がたんぼの家でアートプロジェクトの企画書を作るときは、「科学技術の発展は、物質的な豊かさをもたらした一方、人と人、人と自然の関係性を分断した。それに対してアートは…」などと科学の「悪口」を書く。現状の科学への問題意識は僕も強く持っているが、科学を全否定するのも違う気がするし、悲しい。科学とアートというふたつの関心事の対立や矛盾を何とか解消し、ひとつの鞘におさめてすっきりしたい——それが、僕が『科学とアート』に関心を持つ最大の理由だ。

なぜ、僕のなかでアートと科学が対立するのだろうか。たんぼの家で関わってきたアートは、いわゆる美術アカデミズムのものではない。門外漢を含めた市民によって立ち上げられ、進められてきたものだ。だから既存のアートの枠にはおさまらない。例えば、長年取り組んできた障害のある人の表現活動も、従来はアートと認められてこなかったものだ。少々大げさに言うと、市民の立場で「人や社会の幸福のためにアートで何ができるか」と考えた結果、自然とこれまでの枠組みをこえていったのだろう。おそらくこの「市民」がポイントではないか。僕が覗いた科学アカデミズムの世界に市民の姿はほとんどいない。科学者と市民のあいだには大きなギャップがある。サイエンス・カフェなど、状況を変えようとする動きも出ているが、まだまだ弱いように感じられる。

アートでは市民との関わりがあったのに、科学では市民との関わりがない。そのことが僕のなかで居心地の悪さを生んでいたのではないだろうか。だから、僕がやりたいのは正確に言えば『市民と科学とアート』なんだと思う。科学とアート、それぞれが市民や社会と向き合うことで、従来の枠をこえて広がっていく。そして両者が重なり合い、科学なのかアートなのかかわからない領域が生まれる。そんなことがしてみたい。たんぼの家では「市民とアート」についてやらせてもらった。だから次は「市民と科学」をやってみたくて、目下アイデアを練っているところである。きっとその先に、科学とアートが交わる場所があるだろうという予感がしている。

裕子コラム

### 「旬を教えたくれた思い出」

加久裕子  
1980年福岡県生まれ、2000年に愛知県で一人暮らしをはじめ。2003年オープンマイクと出会い、今も名古屋を拠点に詩の朗読を続ける。

ここ半年で3人の友人の結婚式に出席した。今まであまり意識しなかった「結婚」。自分の幸せが結婚だけではないと考える時代。するものなのか、できるものなのか、必ずしなければいけないものでもないし、必ず幸せなものとも限らない。結婚に正しい形なんてない。いずれにせよ相手がいなければひとりでも結婚はできないのだけだ。

実家に帰ったとき祖母が私に言った。「あんた、いい人おらんのね?おるんやったら早よ結婚しなさいよ」自分が結婚したいと思う人とは…と考えてみてその前に自分と結婚したいと思える人になりたいと考える。それだけが目的じゃないけど、自分にもっと自信をつけたい。そしてもっと自然体でいられるように…とただ今修行中。相性のよさというのはその相手とどれだけストレスなく自然体で長い時間過ごせるかということにある、と何かの本で読んだことがある。結婚して、寝ても覚めても相手と顔を合わせたい。いびきも愛しく感じてくれるか心配だけど。結婚とは夫婦になること。夫婦喧嘩は犬も食わないと言っていたのに最近ではニュースのひとつの事件になることもある。

ひとりでも結婚しているのではないから、お互いを思いやる愛し合いがないと夫婦なんて続かない。愛ある喧嘩は信頼関係が築けているからこそできるものなんだろう。思いやりは夫婦に限らず、家族や友人、仕事仲間にも共通することじゃないかな。結婚を幸せだと思うのは、何十年後に「あなたと結婚してよかった。ありがとう」と相手に心から感謝できたときかもしれない。なんて思いつきながら、まだ経験していない結婚に思っただけで馳せる。祖母への結婚報告ができるのはいつになるやら…

於集電脳女流詩人  
交流向上百花繚乱  
詩的空間月毎更新  
隨時求新同胞以愛

# 蘭

Web 女流詩人の蘭の会

http://www.os.rim.or.jp/~orchid/ W1575(税込のみ)  
ウェブ女流詩人の集いの蘭の会 発行：詩学社  
アンソロジー 装丁：RADIO DAYS ココロームでも好評販売中

http://www.os.rim.or.jp/~orchid/

恋愛研究会。創樹人の

22,581

## 鐘×回どつてもいいことある記念の瞬間!

創樹人  
特殊アートグループ「恋愛研究会。」のリーダーとして、日々どつてもいいことに4割くらいの力で取り組む。  
<http://sutegoro.com/>

あのころのことを、懐かしく思い出すようになりました。

授業だってほとんどさぼったことない自分が、まさか夜逃げなんて、生きているうちにすることになるとは思いもせませんでした。こんなにたくさんの人にご迷惑とご心配をかけたのは初めてのことだと思います。本当に申し訳なかったと、こんな紙面で恐縮ではあるけれど、心からお詫び申し上げます。

さて、あの日、荷物もほとんど持たずに家を出た僕は、気分よく、3畳一間の、テレビと布団しかない部屋で、ほとんど寝ているだけの生活を送っておりました。来る日も来る日も、天井を見つめるばかり。忙しい時分、あれほど見たかったテレビも、ほとんど見ることはありませんでした。

大学を卒業してからサラリーマンを経て、休むことのほとんどなかった自分にとって、望んでいた休暇は、随分と苦しいものとなったのでした。

そんな生活を2か月ほど続けて、気もすっかりしてきた僕は就職活動をしました。とりあえず何かしたくて、一週間で仕事は決まりました。デザイン事務所、朝から夜遅くまで必死に働く毎日。ラジオから、自分が作った曲が流れることもあり。何事もなかったかのようになり、だまてそれを聴きながら作業を続けるのです。本当はそんなことないのだけれど、随分遠くまで来てしまったような思いを抱えながら、1日中パソコンを見つめ続けているのでした。ライブに明け暮れた毎日。あの頃、自分は大きな志の夢と生きていたはずなのに、なんてこんなところでこんなことをしているのだろう。

夢のような毎日は、いつの間にか終わっていたことに気付くのでした。自分だけが取り残されたような気持ちは、いつもこのころどこかにあるのでした。

あの頃のことを、懐かしく思い出すようになりました。僕の人生を、波瀾万丈なものとして語りたくなるようなものにするためにはもうひと山欲しいところです。というわけで、誰かもう少し条件のいい仕事を紹介して下さい! そうじゃないといつか泣いちゃうって!

# cocoroomスケジュール

2007.4.25---2007.6.30

## 【cocoroom主催企画イベント】

●P.P.P.C.B.N. cocoroom booking night  
これで最後となるのか!? ゴールデンウィーク特別企画

「さらば世界と新世界博」  
怒濤の10日間、是非お越し下さいませ!  
特典以外は1500円+1d

3日券 4000円, 5日券 5000円(代別送要)

4/27(金) 19:00 「動けない若者たち」(cocoroom企画)  
ノイズわかめ、ばいばいガバ、吸収合併、黍子興業、自由

4/28(土) 18:00 「猫と文学」(cocoroom企画)  
samurai jazz, ぶう吉ショー、たゆたう、ファックジャパン、  
垂子米×うなてたけし

4/29(日) 19:30 「愛なき世界」(恋愛研究会。企画)

4/30(月・祝) 19:00 「甘いひりは蜜の味」(ウエノアキヒロ企画)  
HANA★JOSS+石井和也、双六、内山大、ヤベミルク、家出少年

5/1(火) 19:00 「コマルーム」(コマイナーズ企画)  
コマイナーズ、ジェロニモ・レーベル、花嵐、袋坂ヤスオ

5/2(水) 19:30 「ど素人SF映画祭」(西尾孔志企画)  
映画上映&トークイベント

5/3(木・祝) 19:00 「P.P.P.C.B.N.」(ウラナチ企画)  
ego-rock、秋江智文、ウラナチ

5/4(金・祝) 14:00 「ひとりてできるのん?」(若旦那企画)  
欠陥ロケット(一)、劇団なるも、ジョニー劇場、犬侍慈代、  
ROPEMAN(29)、はいてつくくねくね

5/5(土・祝) 19:00 「音舞楽劇・青空」  
(デカルコ・マリイ企画)

5/6(日) 15:00 「こわれ者の祭典in大阪」 2000円+1d  
月乃光司、山本公成、上田假奈代 オープンマイクあり  
\*

5/11(金) 19:00 BODY SONIC、表現太郎、ポールシフト、  
徳地秀隆、かわぐちたけし

5/31(木) 19:00 panama、エキセントリックセンチメン  
タルジャーニー、ぶすぶす ほか

6/15(金) 19:00 灯台舎、犬侍慈代、西裕加、  
HEAVENS BRIDGE SYSTEM

6/30(土) 「ウエノアキヒロ企画」 詳細未定

## ●「生きる仕事シリーズ」

5/16(水) 19:00 500円 ファシリテーター:上田假奈代

## ●「ハローハローありんこ会議」

5/20(日) 18:30 500円(お菓子つき)  
ファシリテーター:藤井菜摘(非正規アパレル)

※1d表記のものは500円ドリンクチケットです。  
※すべての開場は開演の30分前です。

## 【BIG NEWS !】

生活保護受給者たちによる紙芝居劇団「むすび」が、イギリスで7月に催される「ten feet away international」という国際フェスティバルに招聘されることになりました。しかし、問題は山積み。渡航費はなんと国際交流基金からの助成をいただけることになったのですが、宿泊費などの算段がつかないのか現状。果たして「むすび」は海を越えることができるのか?  
今回の海外公演の意義を踏まえ、cocoroomでは基金をつります。どうぞ「むすび」を応援してください。

「むすびイギリス公演募金」 一口: ¥2000- から

## ○振込銀行口座

りそな銀行 大阪恵美須支店  
ムスビバックアップノカイ 普通 2412536

※お振込いただいた際にはcocoroomまでご一報  
いただけたら幸いです

## ●「ten feet away international」

7/26(木)~29(日) 会場: 英国 サウスバンクセンター  
英国、アムステルダム、ドイツなどのホームレスアーティスト達、むすび ほか

●「紙芝居劇団むすび」がテレビでとりあげられます  
テレビ大阪系「石橋勝のボランティア21」  
関西圏の放映は5/18(金) 10:00 から

○「紙芝居劇団むすび」ボランティアを募集しています  
むすびボランティア係:  
bontama@cyber.ocn.ne.jp (石橋)  
むすびプロジェクトブログ  
http://musubiproj.exblog.jp/

## ●「BOOKS ARCHIVES第97夜」

5/21(月) 20:00 入場無料+1d  
朗読: 上田假奈代

## ●上田假奈代の日常きもの指南

5/7(月)・28日(月)・6/4(月)・26(火) 19:00 1500円  
要予約: 先着2名まで

## ●「CHIMES~prick up your ears~」

6/16(土)~30(土) 12:00ころ~22:30  
作家: 飯田和美 ※壁面を使った展示企画

## 【おすすめイベント】

### ■「即興表現 WORKSHOP #27」

5/15(火) 19:00 1500円+1d(見学者の方も同額)  
企画・参加: 向井千恵ほか info: DQM06014@nifty.com

### ■「仏像、大好き!」出版記念トークショー

5/17(木) 19:00 1000円(1ドリンク込)  
田中ひろみ、国木田かつば、吉村智樹、コマイナーズ

### ■Limited Spice / 劇団ガバメンツ公演 「OnePlate Comedish」

5/25(金): 14:00(A)/17:00(B)/20:00(A)  
26(土): 14:00(B)/17:00(A)/20:00(B)  
27(日): 14:00(B)/17:00(B)  
前売・当日2000円 通し券3000円(A・B両プログラム)  
ペア3500円(A・B両プログラム) いずれも1d込み  
作/演出 早川康介(劇団ガバメンツ)  
info: gabaments@hotmail.com

### ■上映会「eat the weak」

6/1(金) 20:00 1000円(1ドリンク込)

## 【cocoroomから飛び出す事業】

### ■「詩と音が出会うワークショップ」

4/29(日) 14:00 300円  
会場: 京都芸術センター 講堂  
ナビゲーター: 宮本安子 (打楽器奏者)、上田假奈代  
対象は小学生だが見学可能 info: kacinfo@kac.or.jp

### ■「違和感が知らせる世界の新鮮さ一境界知の発見」 瀬名秀明×橋本敬×上田假奈代

5/12(土) 19:00  
会場: ジュンク堂書店池袋本店 tel.03-5956-6111

### ■詩の学校

講師: 上田假奈代 1000円(筆記用具、ノート持参)  
@應典院 5/30、6/13 (すべて水曜)  
19:30~21:30 tel.06-6771-7641  
@京都芸術センター 5/24、6/21 (すべて木曜)  
19:00~21:00 tel.075-213-1000

### ■ライブ「ハ文字屋のバックスに捧ぐ」

6/10(日) 詳細未定 上田假奈代、nyoutaro ほか  
会場: ハ文字屋 tel.075-256-1731

### ■「ことばをひらく 声をひらく」

6/17(日) 詳細未定 上田假奈代 ほか  
会場: 京都芸術センター tel.075-213-1000

### ■「日本ボランティア学会」

6/24(日) 詳細未定 場所: 大阪市立大学 (大阪市住吉区)  
[事務局] 財団法人たんぽぽの家 tel.0742-43-7055

### ■「こえとことばのワークショップ in チャッピールーム」

5/11(金)・26(金) 13:30 以降もつづきます  
※視覚障がい者とのワークショップです  
講師: 飯島秀司  
会場: 視覚障害者リハビリセンターライトハウスジョイフル  
センター

### ■シマクマガンホーズ infomation(上田のぞ/飯島参加)

5/5(土・祝) 「千日前ごちそう館~最終回」  
19:00 1500円/1800円(+1d)  
会場: アメリカ村サンホール tel.06-6213-2954

### ■ときは文庫infomation(横山千秋参加)

6/21(木) 詳細未定  
19:30 1000円+2オーダー 会場: 京都 西院ウーラ

## cocoroom cafe information

上田のぞ

cocoroom cafeのフードメニューは日替り定食「まかないごはん」(600円)で、家庭的な食事です。これまで好評だったおかずの中からレシピをひとつ紹介します。

＜高野豆腐のイタリアフライ＞

材料(4人分):

高野豆腐2枚、Aく卵1個、にんにくすりおろし1片、  
小麦粉大さじ2、粉チーズ大さじ4、パセリみじん切り  
適量>、パン粉、サラダ油

作り方:

- 1 高野豆腐は水につけて戻し、水気を絞って一口大に切る。
- 2 ボウルに高野豆腐とAを入れ、よく混ぜる。
- 3 パットにパン粉を入れ、2を一つずつ入れてパン粉をまぶすつける。
- 4 サラダ油を熱し、からっと揚げる。お好みでケチャップをつけて食べる。鶏胸肉のそぎ切りや、しいたけ・じゃがいもを適当に切ったものでもおいしかったです。白身のお魚でもいにかもね。

## ★cocoroom cafe NEWS!!

小梅チューハイ、小梅カクテル(各500円)は甘酸っぱくて飲みやすいですよ。  
アイスバナナチョコ(200円)もオススメ!

カフェスタッフいつも募集中!



### cocoroomでは、寄付をつのっています。

運営のための寄付をつのっています。ご寄付いただいた方には、お名前を「ぼえ犬通信」に掲載させていただきます。3000円/1口 何口でも結構です。

古谷晃一郎様 米子匡司様 杉崎真之助様 河崎はるな様 藤村卓司様 川村智代様 塩谷光栄様 遊様 広田和典様 田中梨子様 ありがとうございました。

三井住友銀行 天王寺駅前支店 普通1585265  
トクテヒエイリカツドウホウジンコエトコトバトココロノヘヤ

郵便振替 記号01090-5-48059  
ココルーム



特定非営利活動法人えとことばとこころの部屋



zip556-0002 大阪市浪速区恵美須東3-4-36  
フェスティバルゲート4F  
tel.06-6636-1612 tel&fax. 06-6636-1662  
http://www.kanayo-net.com/cocoroom/

- ※地下鉄御堂筋線・堺筋線「動物園前駅」5番出口直結
- ※大阪市営バス「地下鉄動物園前停留所」すぐ
- ※JR環状線・関西線「新今宮駅」下車 徒歩すぐ
- ※南海電鉄本線・高野線「新今宮駅」下車 徒歩5分
- ※阪堺電軌鉄道「南霞町駅」下車 徒歩すぐ
- ※駐車場(有料)

■新世界アーツパーク <http://www.sap-s.jp>

パートナー依頼/ココルームでフライヤーやフリーペーパー配布協力いたします。また、「ぼえ犬通信」を配布させていただけるお店の方、ご連絡下さい。